コスモス

母の思い出

本多　謙　編

母　本多元子

1990年ころ、米国旅行時に撮影

多磨霊園の本多庸一と本多家の墓の前にて（1983年ころ）

左から謙、母元子、長男寧、妻千香子

今は母と長女淑（しゅく）がこの墓に眠っています。私謙は本多家の継承者として両親の了解のもと30年以上この墓を守って来ました。

まえがき

母、本多元子が1999年9月4日に昇天してから今年で8年になります。この小冊子は、母のイメージが年を経るごとに希薄になってゆくのを惜しむ私の思いから私が発案し、ご賛同頂いた方々からの原稿やお話しになった内容を整理、確認して纏めたものです。

母も一人の人間ですので、人によっては短所に映るところも長所に映るところもあっただろうと思います。「思い出の記」は讃辞の羅列になり易いのですが、母を悪く言う声はほとんどありませんでした。

母は、稀有な、と言っても良い貴重な人格を備えていたと思います。この人格は本多家の他の方々にも共通しており、その家系の文化として自然に身に付いたものではないかと思われます。これを記し遺すことはその長子である私の責任ではないかと思う次第です。

題名の「コスモス」は母が好きだった花です。後藤靖子様に教えていただきました。

関係者が高齢になったり、私の空いた時間を使って少しずつ作業を進めましたので、2年越しの仕事になりました。取り敢えず‘07年版という形になりました。

2007年秋

本多　謙　記

目　次

本多元子さんの思い出	後藤靖子	11頁
本多元子さんの思い出	島田悦子	13頁
人という宝	平間光子	15頁
本多元子さんの思い出	藤元りゑ	17頁
思い出すこと	宮之原和人	21頁
母について思い出す事々	本多　謙	23頁
出逢い	本多元子	43頁
略歴		47頁
あとがき		49頁

本多元子さんの思い出

後藤靖子

50年以上前のことですが、拙宅に本多繁様宛の手紙が届きました。私の夫が同じ繁なので間違って配達されたのでした。近所でもあるし、宛先の住所にその手紙をお届けしたのが元子さんとのお付き合いの始まりでした。

私は自宅で、近所の主婦の方々に洋裁をお教えしていまして、元子さんも洋裁を習いに来られる様になりました。生徒さんが楽しみに来る場を心掛けていました。

元子さんはいつもやわらかく話す人でした。色々問題があった様ですが、一度も旦那様の悪口を言ったことがありませんでした。真面目な人でした。元子さんは八木山では文化人として一に入る人だと思います。（編者注；後藤さんのお住まいは仙台市太白区八木山。この地域は住宅地で、東北大学の関係者など文化レベルの高い人が多く住んでいました。）

元子さんが私の教室にこられた時、足が冷たいと訴えられたことがあります。私が足を揉んであげると、気持ち良いなと言っていました。更に靴下を穿かせて差し上げると、暖かくなって眠くなった様なので、眠っても良いよと言うとそのまま気持ちよさそうに眠ってしまいました。

元子さんは鈴木家に嫁ぎ、後に本多姓になりましたが、自宅を訪ねた

際に小さな箪笥の様なものを私に見せて、本多になってから、貰ったものはこれだけで、他には何もなかったと言っていました。
（編者注；母は宮之原元子として育ち、鈴木家に嫁ぎましたが、後に母方の本多家の夫婦養子となりました。）

元子さんはコスモスがお好きで、元子さん達とコスモスが一面に咲いている園を見に行ったことがあります。その時の元子さんの顔がとても良かったのを覚えています。元子さんはコスモスが咲く9月に亡くなられました。

本多元子さんの思い出

島田悦子

私には娘が二人いますが、二人とも子供のころから元子さんのご自宅のピアノ教室に通って教えて頂きました。

昭和45年の9月ころから3年間、私の家族は向山小学校の東側に住んでおり、そこは元子先生のご自宅から歩いて5～6分でした。娘の為に河合楽器からピアノを買ったのですが、そのセールスマンから紹介して頂いたピアノの先生が元子先生でした。自宅から通える距離というのも好都合でした。当時元子先生は20人近く生徒さんがいらっしゃいました。上の娘が小学校4年生、下の娘が小学校1年生でしたが、二人いっしょに教えて頂きました。

その後我が家は南光台に引越しましたが、引越した後でも娘達はバスに乗って元子先生の自宅の教室に通っていました。元子先生には上の娘が中学を卒業するまで、下の娘は小学校を卒業するまで教えて頂き、その後、元子先生に紹介して頂いた別の先生に教えて頂きました。

時代が経ちまして、二人の娘たちは共に22歳で結婚し、それぞれ二人の子供が与えられ、私はおばあちゃんになりました。上の娘は大学は保育科に進み、その子供達に音楽豊かな育て方をしたのでしょう、その子供は音楽科に進学して音楽の専門家になろうとしています。下の娘は音楽好きの旦那様と結婚し、その子供たちも音楽に深く関わっています。私の娘達がこの様に生きて来たのは元子先生の感化を受けたからでは

ないかと思います。

　南光台の私の家の近所に宮之原和人さんの自宅があり、和人さんが散歩されていた時に偶々お会いし、世間話をしている内に和人さんが元子先生の実のお兄さまであることが分かり、お近ずきになり、和人さんのご紹介でこの様な思い出を語ることになりました。

人という宝

平間光子

本多元子さんが礼拝で弾いてくださったあのオルガンは、ギーコギーコと歴史のある音をたてながら現在もがんばって音を奏でてくれております。

一九八七年四月、身体障害者自立ホーム・仙台ありのまま舎の設立の年に、本多元子さんと藤元りゑさんのお二人が外部から共に礼拝を捧げたいと来てくださいました。

自立ホームは、キリスト教精神に基づき開設され、信者の人も信者でない人も入居し、当維持は二十人が暮らしておりました。

毎週行われている礼拝は自由参加ですが、本多元子さんと藤元りゑさんのお人柄に親しみを覚え、礼拝に参加する入居者が徐々に増えはじめました。毎月ではありませんが、参加者が僅かなお金を出し合い、愛餐会ということで礼拝後にお二人が食事を作って下さいました。彩りよく盛られたそのご馳走はテーブルに並べられ、大勢で美味しくいただきました。自立ホームの人は車椅子の人が多く、一食作らなくてもよいので愛餐会はとても魅力であり大変助けられました。食後の片付けは皆でわいわい言いながら終るのですが、家庭的な雰囲気を味わい誰彼となくその場に残っておりました。

本多元子さんは洋裁ができると聞いた入居者はとても喜び、リフォーム

をお願いする様になりました。簡単に買うことのできない服を手直しで一枚の服を大切に着られ、ファスナーの長さを替えることで動きも良くなりちょっとしたところを大いに助けていただきました。入居者は、本多元子さんを部屋へ招きお茶をしたりお話を聞いてもらい、それぞれが心豊かに和やかな空気に包まれて行きました。本多元子さんと出会い、人という宝を私たちはもらいました。

暑い日、寒い日にかかわらず椅子に正座をし、説教をじっと聞いていらした本多元子さんのお姿は今も忘れられません。話を聞く姿勢として、私も背筋が伸び、思いの深さを学びました。

あれから八年、私たちの仲間のあの人もこの人も幽冥界に行ったと指に数えております。心を静かに仲間を偲び、そして、本多元子さんを偲ぶことができましたこの今、この時をお与え下さいました、本多謙様に心よりお礼を申し上げます。

本多元子さんは、今もはっきりと私たちの心に生き続けております。

仙台ありのまま舎
入居者　平間光子

本多元子さんの思い出

藤元りゑ

本多さんとは今から33年前に知り合いました。

教会を通しての交わりでしたが、私が西多賀の療養所にボランティアで縫物の仕事で行っていましたが、ガーゼたたみなどではなく、直接患者さん達の衣類の縫製でしたので沢山の仕事があり、私一人では間に合わず、本多さん、麻生さんが加わりました。その時筋ジストロフィーの患者さん達とのつき合いがはじまりました。

ある教会が会堂を新しく建てるという話を聞いて私と本多さんとで、ストッキングを売ることにして、ほんの、いささかの利をささげるつもりでしたが、お金のある教会でしたので必要はない様なので筋ジスの患者さん達の施設「ありのまま」建設の方に寄付をいたしました。これが「ありのまま」とのつき合いのはじまりです。

それからこの教会を離れることになり、（ある事情のため）自分の行ける教会を、と祈っていましたら「ありのまま」が出来上り礼拝堂も出来たので、その献堂式の通知のはがきが私に届き、あ、ここだ、と感謝しました。

その時元子さんは東京でしたのですぐ手紙を書き私は「ありのまま」第一回からの礼拝をうけました。元子さんには直ぐオルガンの仕事が待っていて。ホーム入居者の方々と一緒の礼拝です。不自由な身体でいつ

も明るく生きている方々と一緒にいる事は私達が何かして上げるということではなく私達の方が力をいただいているということで明るく楽しい礼拝をうけさせていただきました。「ありのまま」の台所も自分の台所の様につかわせていただき、ありがたい事でした。

元子さん達と雑巾の話しをしたことがあります。幸田露伴の娘さんの幸田文さんの文にこんなのが載ってました。使い尽した雑巾を、きれいに洗った後、ありがとうと言って捨てる話でしたが、元子さんは、自分はそれを干してから風呂焚きに使う、と言っていました。同じクリスチャンとしてこころの通い合う人がいなくなって寂しい思いです。療養所では縫いものをし乍らこんな話をいつもしていました。

年月が経って年をとってくると私も教会を定めなければならないという心配が出て来て、自分の葬式はどうするのか等々、丁度二人の息子の結婚時期でしたので教会を移ることにいたしました。元子さんは最後迄「ありのまま」の礼拝を守り、入院直前までオルガンを受けもたれたそうです。二男さんに送られて行ったそうです。
頭が下がります。

私はもともと体が丈夫ではありませんでしたが、ある時健康診断を受けて、そのことを元子さんに話したら、自分はいつ死んでも良いと思っているから、検査なんか受けない、何故検査なんか受けたのか？と言われたことがあります。元子さんは私よりずっと健康な方でしたが、体調を崩され、整形外科で診てもらったら癌ということで、ガンセンターでの末期医療になりました。

病に臥される前には、元子さんは近所の洋裁教室の後藤先生のところに行くのに道が分らなくなって、大分遅れて着いたことがあったそうです。もう何年も何回も通った道ですのに。

元子さんはご自分が皆のお手本になる立場であることを自覚され、そのように一生懸命立派にしていなければと思われていた様ですが、それに疲れてしまったのかも知れません。

ご家庭の中でもボランティアの時もひたすら頑張りつづけた元子さんです。友人より早く逝かれて無念だったでしょうが、今思えば、皆さんに親われ、良くされ、なんでも出来るご主人がのこされても心配ないし、お子さん達は立派に生活され幸せだったと思います。

思い出すこと

宮之原和人

私（和人）と元子の間だけ年齢さが2歳で他の兄とは4歳、姉とは8歳、一番下の妹と元子の間も4歳でした。

年齢の差が小さくても特にどうという事はありませんでしたが、小さい時から気になっていました。

昭和11年、私が中学を卒業して山形から福島へ（福島電灯入社）、兄は既に青山学院在学中だったから、その時から元子、哲子と両親の生活形態にありました。

昭和15年2月から（八戸）私は朝鮮へ、兄は満州へ夫々現役入営で留守家族は相変らず。元子の活躍の始まりです。

藤崎へ行ったり父の病気で小田原へ行き、哲子の入院死亡や父の葬儀など大変だったろうと思います。

弘前の沢山の親戚との関係などの接渉などもあったでしょうからご苦労なことでした。

僕が病院船で帰省復員し国立千葉病院に居た時、初めて繁さんと元子が見舞に来て下さってお会いしたわけで、それ以降の事については謙さんのご体験にある通りですから省略します。

（編者注：）和人さんは帯状疱疹の為字が良くかけない中で上の原稿を送って下さいました。

母について思い出す事々

本多　謙

何かのきっかけで忘れていた過去を思い出すことがある。ある日「めぐりあう時間たち」というビデオを見て自分の子供時代の経験を思い出した。このビデオは三人の中年の女性のある日の生活を交互に描写したものだが、その内の一人が英国の女流作家のバージニア・ウルフ。彼女は「ダロウェイ夫人」を執筆している。もう一人は 10 歳くらいの男の子を持つ主婦。この母親は家庭を牢獄の様に感じ、死のうとするが、その為にホテルに行こうとし、その為に男の子を保育所に預けに行く。男の子はそれを察知し、母親の車の後を懸命に追い駆けるのだが、母親の車に追い付くことができず、一人後に残されてしまう。彼女はホテルの一室で一人静かに「ダロウェイ夫人」を読み、睡眠薬を飲もうとするが、死に切れず、数年後に男の子を残して家出する。三人目はエイズになり精神不安定になった作家の生活の面倒を見ている女性。この作家は昔の男友達で、彼はこの女性を「ダロウェイ夫人」と呼んでいる。この女性は作家の子供が欲しかったが叶わないので医者と契約して誰かの子供を生んで育てている。この男性作家の作品が賞を得たのでそのパーティーを開こうとあれこれ準備し、パーティーに彼を迎えに行った時、彼は窓から飛び降りて死んでしまう。そして準備が全て整い、誰も来なくなったパーティー会場に一人の老女が尋ねて来る。この女性が死んだ男性作家の母親で二番目の女性であることが分る、というのが粗筋だ。このビデオは何回か繰り返して観たが、「この男の子は僕だ」という思いが消えなかった。というのは、これと似た体験を思い出したからだ。

母は 34 歳から44歳まで仙台市の八木山にある幼稚園の教諭として月曜から土曜まで毎日勤務し、日曜は同所にある教会の日曜学校の先生をしていた。母はこれらの活動にとても熱心だった。私が 6 歳から 16 歳までの間になる。最初の何年かは近くの養老院にいる老女に留守番を頼んでいたが、それが老衰で来られなくなり、私が小学校から帰っても柱時計だけが時を刻んでいるという日が何日もあった。ある日私は寂しさから、母に会いたくなり、幼稚園まで歩いて行った。家から幼稚園までは大人の足で20分くらいの距離だろうか。私は幼稚園の園庭が遠くに見える建物の影に隠れて園庭に母が現れるのを待っていた。母に会いに行って母の仕事の邪魔になることを恐れたからだ。暫くして母は幼稚園の園児達と園庭に出てきて他所の子供達としばらく遊んで、また園舎に戻って見えなくなった。私はそれを見て、複雑な気持ちで家に戻った。

この様な体験があった為かも知れないが、私はいつか母に、子供の教育上良くないからという理由で幼稚園を辞める様求めたことがあった。恐らく私が 15 歳くらいの時だったろう。母はそれを悲しんだが、暫くして幼稚園の教職を辞し、代わりに幼稚園と自宅でピアノを教え始めた。八木山の自宅の 4 畳半の茶の間の隣の襖を隔てた6畳間でピアノを教えていたのでピアノの音がまともに聞えて来てはいたが、私は母がそばにいることで満足していた。しかし別の寂しさが残った。

母は家庭を守るだけでは満足しない人だったろうが、「ダロウェイ夫人」の読者の様に家が牢獄の様にも感じていたのではなかったろうか。そう思う理由がもう一本のビデオで想起した、忘れていた体験だった。

「ミリオンダラー・ベイビー」というビデオを最近観た。若くは無い女性がプロボクサーになろうとし、老トレーナーに教えを請い、トレーナーの指導で成長し、チャンピオンの一歩手前で首を損傷し、寝たきりになり、自殺を試みるが失敗し、やがてトレーナーが彼女の生命維持装置を外すことになり、彼女は死んでしまうと言う物語だ。彼女はボクサーをして成功した時に故郷の自分の家族をトレーナーに紹介するが、その時に子供のころの心の傷をトレーナーに語っている。彼女の家には足の悪い老犬がいて彼女の良い友達だったが、彼女の父親がある日スコップと老犬を車に乗せてどこかへ行き、スコップだけで帰って来た、という思い出である。父親は、役に立たない老犬を安楽死させたつもりだったかも知れないが、彼女の友達を殺したという事実を作ってしまう。これが、寝たきりになり、足が壊死を起こし、片足を切断した彼女が自殺を図る伏線になっている。彼女がそれを思い出して自殺を意識したかどうかは不明だが、意識の深いところで片足を失ったことと死を結び付けたのだろう。子供のころのこうした体験は意識の底に深く沈んでいて、成長した後も意識や考えや行動に大きな影響を及ぼす。

仙台市八木山に引越してしばらく経ったある日、父親が家に生まれて間もない雑種の犬を家に持ち帰った。私が小学校に入る前だったろう。私はその犬をタロと呼んで毎日世話をしていた。タロとは家の近くをよく散歩した。タロは次第に大きくなり、力が増し、散歩の時は私を引きずる程になった。ある日私が家の近くにいるとタロが寄って来て、追い払っても何度も私のところに来るので、家の方を見ると誰かがカメラを持って立っているのが見え、私はその人がタロに私のところに行く様に言ってい

たのが分った。タロと私は並んで写真に納まった。写真の中の私はしゃがんでいて、前足を立て尻を落としたタロと同じ高さだった。タロは更に成長し、月夜の晩などにはよく咆える様になり、父親はそれを煩さがって居た。ある日、朝からタロが何度も私に鳴きかかって来て、今日はどうしたのだろうと思っていたが、その日の午後、繁氏は自転車に乗ってタロを何処かへ連れて行き、タロは居なくなった。自転車に引かれて去って行くタロは何度も何度も私と母を振り返っていた。後で母から、タロは東北大学の実験用動物として連れていかれたことを聞いた。「あの日タロは随分鳴いていたのよね」と母はその後何度も言っていた。犬が月夜に咆えるのはその習性なので仕方の無いことだが、それを騒いとして実験用動物として売り付けるのは、スコップで殴り付けて殺し、穴を掘って埋めるに等しい行為になるだろう。私は当時何も分らなかったが、それが大事な親友を失っていたのだと分ったのはずっと後になってからだった。

母は1921年（大正10年）12月 19 日に生まれ、星子(姉)、右近（兄）、和人（兄）、哲子（妹）の兄弟があったが、和人氏を残して皆若くして亡くなった。母の家族が1つ家に住んだ期間は長くはなかった。宮之原家は牧師の家で、地方の教会を異動した。母は当時の東京府世田谷村に生まれ、7 歳の時に福井に引越し、14 歳の時に家族を離れて弘前女学校の寮に入った。同校を 20 歳の時に卒業し、直ぐ家族がいる小田原に移り幼稚園の教諭を始めた。20 歳の時に父親を亡くし、23 歳の時に妹を亡くしている。兄右近氏は戦死し、姉星子は母が11歳の時最初の子供の出産の時（昭和7年、1932年1月）亡くなっている。和人氏は東北電力に勤務し、その為仙台に住んでいたが、母が兄の和人氏を訪問し交

流するのに対して繁氏は良い顔をしなかった。一方の繁氏は9人兄弟で、その交流の密度は濃かった。その兄弟が仙台の繁氏の家を訪問した時、母は自分の孤独に涙した。私はそれを見て慰めの言葉を掛けるだけだった。そう言えば、一家が仙台の八木山に引っ越して間もないころ、祖母の宮之原まりさんが当時住んでいた福島から遊びに来たのだけれど、繁氏に何かを言われて怒ってさっさと帰ってしまったことがあった。私が4,5歳の時だったろう。母の気持ちは推測がつく。まりさんは私が5,6歳のころ福島で亡くなった。私は両親に連れられて福島市まで行き、葬儀に参列した。

母は1936年、14歳で弘前女学校に入学し、41年、19歳で同校を卒業している。受洗は15歳の時だろう。この間繁氏は弘前高校の学生で、母は繁氏に教会関係で会っており、母達は彼をその頭の格好からサトイモと呼んでいたそうだ。10代の女性達が集まって知っている男性の批評をし合うのは普通のことだから、母も友達とその様な会話をしたことだろう。母は卒業後家族と共に神奈川県小田原に引越し、ここで父親と妹を相次いで亡くしている。この間紹介する人があり、繁氏は小田原の宮之原家を訪ねている。生活にも困っていただろう。繁氏の紹介者は山本蟻人氏だったと思うが、繁氏は1泊程度で帰る予定の滞在が延び、蟻人氏が帰る様促しても帰らず、1週間以上滞在が延びたと蟻人氏から聞いている。母は美人の方だったし、弘前の教会で本多の血統だということで人にも知られていただろう。従って繁氏が母を高校生の時代に見知っていた可能性は充分ある。1944－5年の混乱した時代に人の薦めでたまたま紹介された女性が高校生時代に見知っていた女性であったことは繁氏に運命を感じさせたのかも知れない。母にとってみれば、この時

は3年前に父を亡くし、妹を亡くし、兄が戦死し、弟が出征で外地におり、老いた母と二人でさぞ不安だったことだろう。姉はすでに10年以上前に亡くしている。母は45年7月、23 歳の時に疎開の為弘前に引越し、同9月に結婚している。

母は名前が元子なので、「昔はモッチャン、モッチャンと呼ばれていたのよ」と言っていたが、それは子供の私の知るところではない。元子、と呼び捨てにされ続けていた。母への呼びかけの言葉がどの時点でモッチャンから元子になったかは不明だが、恐らく弘前時代だろう。繁氏が弘前で教員をしていた時、学生を呼び出して彼に足払いをかけ、その為に学生は転倒し、負傷し、後遺症の為学校に来られなくなったのだ、という話しを時々母から聞いた。この種の暴力行為はそれだけでは無かっただろう。母が繁氏の勤務先の管理者に相談に行き、それを知った繁氏が裏切られた思いになったことは彼の半生記に書いてある。女性は相手と面と向って対決する様なことはせず、力になってくれそうな別の人に助けを求めるのが一般的だが、母にしてみれば極く自然の行為だったろう。仙台の八木山の家での暴力行為が弘前時代にもあっただろうことは推測でしかないが、可能性は高い。このころが「モッチャン」から「元子！」への転換点だろう。

鈴木繁氏がなぜ本多家を継ぐことに同意したのか、なぜ京都大学生の2年間しか京都に住まなかったにも係らず関西弁を真似した喋り方をその後何十年も続けたのか、なぜ京都奈良、関西にある仏像の写真などを何枚も家のあちこちに飾ったのか、何故本多家の歴史を研究したのか、何故少しでも軽く見られたと思うと激怒するのかは疑問だったが、繁

氏が近年出版した半生記を読んで見当が付いた。それは伝統と血統に対する強い拘りとその裏にある劣等感にあると推測される。彼はこの本の中で、自分が本多家に連なる事を強調し、成り上がり者を「貧乏人の先祖探し」と呼んで軽蔑している。この語句はこの本の中で何度も出ており、この本のメインテーマの1つと理解される。この本の表現は公平を装っているが裏は悪罵に満ちている。繁氏の先祖の鈴木家は千葉の佐倉あたりの農家だから、私はそれが悪いとは言わないが、繁氏はそうではない本多家を継ぎ、その家系に連なることが名誉に思えたのだろうし、その為に尽くすことは彼の劣等感を補填し、且つ彼の価値観に適っていたのだろう。仏像や関西弁に対する拘りも同じ根からと推測される。一方では婿養子である拘りから母が同じ仙台市に住んでいた兄の和人氏と交際させたくなかったのだろう。そうさせれば母と繁氏の力関係が微妙に変化するだろうからだ。子供のころ母と繁氏の劣等感について話した記憶がある。母は「お父さんには栄さんっていう双子の兄弟がいたのよ。栄さんの方が男前で、ずっともてていたんだって。」という風に言っていた。仙台の家で栄氏の写真を何かの機会にちらっと見たことがある。母の言った通りハンサムだった。栄氏は若く亡くなっている。

珠子さんを弘前に住んでいたころ一時預かっていたことがある。珠子さんは宮内俊三牧師と姉の星子さんの娘で、星子さんは珠子さんの出産の時に出血多量で亡くなった。私が3歳になる前だから、1953年ころだろう。母は32歳弘前の家の2階の珠子さんの部屋に姉と何回か遊びに行ったことを覚えている。私が練馬の宮内牧師の教会に通う様になり、牧師と母のことを話す機会があった。宮内牧師は母を、誰に対しても優しい人で皆に好かれていたと褒めていたが、気性の激しさについても言

及した。母の姉の星子さんは宮内俊三牧師と結婚し、珠玉子さんを生んだ時に亡くなった。母は1945年から珠玉子さんと共に弘前に疎開していたが、一緒に住んでいた時のことだろう、二人の間に諍いがあり、母は珠玉子さんを、包丁を持って追い駆けた、ことがある、という話しを宮内牧師が話した。あの優しい元子さんにあんなところがあったなんて、という感想だった。

私が小さかったころ母が自分の手の親指を見せて、自分の親指は手術したので短くなった為にピアニストになることを諦めたのだと言った。どちらの親指だったかは忘れたが、左指だったかも知れない。よく見ると、確かに少し片方がより短かった様だった。ある日小学校から帰ると家で母が狂った様にオルガンを弾いていた。母が繁氏にねだってようやく買ってもらった粗末なオルガンだった。第一次世界大戦を描写した曲だと説明してくれた。母は母なりに自分の人生の色々な可能性を諦めて来たのだろう。鬱屈もあっただろう。それを家で一人きりでオルガンの演奏に熱中することで晴らしていたのだろう。母は30代から子供たちにピアノを教え、それは老年に至るまで続いた。

八木山の家では4畳半の茶の間と台所が北側にあり、6畳間が押し入を挟んで2つ南側にあった。私と姉と弟は東側の6畳間の子供部屋に一緒に寝て、両親は西側の6畳間に寝ていた。この6畳間は繁氏の書斎でもあった。在る夜、寝ていると隣の6畳間で物音と人の声がするので3人とも目を覚まし、西側の六畳間の扉を開けると、母が布団の上に倒れて繁氏が仁王立ちになっていた。母は繁氏に何度も殴られ泣いていたのだった。人の声は母が繁氏に殴られた時の悲鳴だった。事態の異常さ

に私も姉も弟もその場に立ち竦んだまま大声で泣き出した。

子供のころ、ある夜、家の裏口で物音がするので、見てみると. 戸の外から「お父さん、入れて、入れて」という母の声が聞こえた。子供心に胸が痛んだ。こういうことが何度もあった。母は、お父さんは心臓弁膜症だから、興奮し出すと止まらないから仕方が無い、と言うことが何度もあったが、私はそんなものだろうか、と思うだけだった。この疑問は2006年に繁氏が心臓の手術をした時に消失した。私は手術の担当医から手術の経緯と術後の経過の説明を受けたのだが、その時に、彼の心臓に弁膜症の既往症など無かったかを質問したが、それは無いという回答だった。医師は何故そんな事をきくのだろうか、という不思議そうな顔をした。母は自分を言い聞かせ、暴力に耐える為にあの様なことを言って自分を納得させていたのだ。

繁氏の興奮は何がきっかけで起こるか予測がつかなかった。興奮し出すと恐ろしかった。例えば朝おいしい炊き立てのご飯を食べていると、自分は歯が悪いのでこんな固い飯は食べられないと言って再度飯を炊くよう要求し、新たに炊き上がった水っぽい飯をこれで良いと言ってそれを食べたりした。良くは思い出せないが、子供の声がうるさいとか、その様な理由で興奮し出すことがあった。母がある時、我が家の子供達が何故こんなに大人しいのだろうか、と言ったことがあったが、私にはその理由が分っていた。子供達は皆父親の前では出来るだけ目立たす、父親を刺激しない様に自分を隠す習性が身に付いてしまったのだ。それは私が社会に出てから乗越えなければならない大きな課題の一つだった。

母は繁氏に意見や感想を言えなかったと思う。言えば叱責されただろう。ある日家の模様替えか何かで繁氏がどの様にしたら良いか考えていたことがあった。母はその時、こうしたら、という様なことを言った。考えているのだから黙っていろ、というのが繁氏の反応だった。その様なやり取りは朝食や家族が夜集まっている時に何回か見聞きした覚えがある。ある時、繁氏が「偉っそうに」と吐き棄てる様に言っていた。

家では教育に厳しい方だったろう。私の小学生時代は、夜7時になれば3人兄弟机を並べて勉強していなければならなかった。時に私だけ繁氏の書斎に呼ばれて漢字の書き取りをやらされた。間違うと頭を殴られた。涙で教科書の文字が見えなくなり、その為に間違えても殴られた。こんな事をやっても効果無いのに、と思ってもそれを言い出すことは出来ず、耐えるしかなかった。姉や弟にはその様なことは無かった。

小学生から高校生時代を通しての親友があり、彼は常に私より成績が良かった。中学生のころ、何故彼は成績が良くて私は悪いのか不思議に思って親友のやり方を観察したことがある。そして分ったことは、私は余り良く考えないで回答を書いてそのままにし、親友は丁寧に自分の回答を検証している、ということだった。そしてその差の原因が自分の情緒にあることが分った。自分の情緒が安定していないのがその根本の理由であることが分った時、その不安定が何処から来るのかも分った。

私は小学校にあがる前から本を読むのが好きだった。小学校の教室や図書室の本で面白そうな本は大体読んでしまったので、繁氏が当時

勤務していた宮城学院女子中等学校の図書室に連れていってもらい、そこから面白そうな本、主に文学全集だった様だが、を借りて読んでいた。一方で漫画もよく読んだ。知人の物置で少年サンデーの創刊号から数年分のバックナンバーを発見した時は数日間その物置に通って朝から晩まで漫画を読み続けた。私は自分の空想の羽をその世界で存分に広げることが出来た。私は親にいわれて東北学院中学に入学したが、そこでは同じ敷地内の高等学校の図書館に自由に入って好きな本を借りることができた。私は高校の図書館には興味ある本がいくらでもあった。一方、中学時代にはプラモデルが日本でも出回り始め、私は友人と飛行機のプラモデルを良く作り、互いに批評しあっていた。プラモデルは作る前にモデルになった飛行機に関する情報を収集し、その中から自分の選んだ型式に適う様に作るので、作っている間は空想の世界に浸ることができ、そこが楽しみだった。出来上がったプラモデルはその記憶の残骸に過ぎないが、空想の世界に遊んだ記憶を大事に思う為に部屋にいくつも飾っておくことになる。漫画とプラモデルが繁氏には不興だった。どちらも棄てる様に度々言われたが、私にはそれは出来ないでいた。ある日の朝、繁氏は私の部屋に入り、勝手に本棚に整理して並べておいた漫画本を棄て始めた。私はそれを見て、「止めろ」と叫んで繁氏の背中に飛び掛って行ったが、逆に押え付けられ、馬乗りになられ、顔の両側を両手で交互に何度も殴られた。私は無抵抗のままだった。その場はそれで終ったが、私は棄てられてしまうくらいなら自分で棄てようと決意し、本棚の漫画本と部屋に飾ったプラモデルを全て自分で始末した。母は驚いた顔をして私を見ていた。私は自分が生きていた空想の世界で生きることを自ら止め、代りに屈辱感にまみれ、無力感が残った。その夜、私は台所から包丁を持ち出し、繁氏の書斎の戸を静かに開けた。母

は台所にいたかも知れなかった。繁氏は背中を見せて何かを書いていた。私は包丁を振り上げて繁氏を襲おうとしたが、その日の朝の体験を思い出し、成功しないだろうことが想像できたのでそのまま台所に戻って包丁をしまった。それを見た母は驚いた顔をしたが何も言わなかった。

私はこの様な環境から早く離れたいと思った。その後、不良になってやろうとか、家出してやろうかと色々方法を考えていたが、その為に一番損をするのは誰だろう、と色々考えた結果、それは自分だという事に気が付いた。それでその時は家出をしないことにしたのだが、後に家出をすることになった。それは大学に進学して仙台から京都に移った時だった。京都の御幸町教会の一部屋に住んだのだが、その牧師に京都に来た理由を聞かれた時「合法的な家出です」と答えたことを覚えている。私の20歳の時だ。

私は繁氏の暴力を見て体験して育ったので、この様な人には似たくないと思い続け、その努力を続けて来た。しかしながら、残念なことに、子供は親の態度を無意識の内に学習してそれに倣ってしまうものだ。結婚して間も無くのころ、ある時親戚を夫婦で訪問した時泊まる様に誘われ、私は泊まりたかったのだが妻（千香子）が帰りたいとしきりに言ったので帰ったことがあった。私は立腹して帰る途中妻を殴った。妻は鼻から血を出し、それを黙ってハンカチで拭っていた。私は暴力を振ってしまったことを後悔したが、同時に似たくないと思っていた人に似てしまっていたことを覚えて深く悲しんだ。私が私の息子達にした行いの中にも後で考えて不適当だったと思われるものがいくつもあり、その根が仙台での好ましくない学習によるものであることを意識するとどうしようもない思いにな

る。

母は本来明るい人柄だったと思うが、耐える人でもあった。私に長男が生まれ、次男が生まれ、三男が生まれ、その度に母は私の家に何日も泊まり、留守番など色々のことをしてくれた。その度に仙台の家でのことを少しずつだが話してくれた。それは余り楽しい話しではなかった。ある時、冬の夜、繁氏に着の身着のままで家の建物から追い出された、と話した。70歳に近い老女を仙台の冬の寒い夜に部屋で着ていたそのままに裸足のまま家から追い出すという行為はどう理解したら良いのだろうか。それを聞いて、私は私が小さい時に、やはり母が夜家から追い出され、家の外で泣いていたのを思い出した。同時に、私も子供のころ何回か懲らしめの為に家の外に出され、泣いたことがあったのを思い出した。子供を叱る意味で外に出すのは良くある話しだが、興奮に駆られて我を忘れて暴力を振うのでは叱る意味が無くなる。母からは、繁氏からお金をまともにもらっていないことも聞いていたので、次男が生まれて母が我が家に滞在した時に少しまとまったお金を渡していた。母はそれを繁氏に、「ほら、私だって謙からのお金をこんなに持っているのよ」と言って見せ付けたと話していたことがあった。私はそれを聞いて暗い気持ちになった。三男が生まれて我が家に滞在した時に、私は母に離婚を薦めた。このまま我が家にずっといても良いと言ったのだが、母はある日、仙台に帰ると言った。私は何故そこまでされて離婚しないのか質したが、「本多の人間はそんなことはしないのだ」というのが回答だった。母は本多庸一の娘が嫁いだ宮之原家に1921年に生まれ、本多繁と1945年に結婚し、1950 年に本多庸一の息子の二郎の夫婦養子になった。彼女なりに本多家を継ぐことに対する美意識というか、規律があったのだろう。しかし

ながら、もう少し別のやり方があったのでは無かったろうかと、今でも思う。

これに関連して思い出すのが、ブリジストンの石橋家に後妻として嫁いだ石橋フクさんのことだ。フクさんは分家筋にあたる。仙台の家で本多の親戚のことを色々話して居た時、話がフクさんのことになり、母が、フクさんが意図して子供をつくらなかったのだ、と言った。その理由は、後妻に入って子供を作ると先妻との子の間で色々問題があるからだ、ということだった。青山学院の院長をしていた阿部義宗さんの学校葬の時フクさんが親戚達にホテルオークラで食事をご馳走したことがあって、私も呼ばれた。フクさんが私の斜め前に座っていたので、彼女の話しが割と良く聞えた。彼女は、財産があっても天国までは持ってゆけないからね、などと話していた。ブリジストン美術館に絵画を納めた美術商の松井文彦氏は私の永年の知人だが、彼のギャラリーに石橋正二郎氏がフクさんと共に訪れ、フクさんが事前に目をつけておいた何枚もの作品をフクさんからこれはどお？と薦められるままに、ああ良いよ、と言って何枚もの画を買ってもらったことを松井氏から聞いたことがある。松井氏からは、フクさんが亡くなった時その財産は全て正二郎氏の子供達に残したので、子供達にとって見れば、フクさん様々なんだ、とも聞いたことがある。フクさんは自分の生き方に関する美意識を通した自分の意思を持った婦人と言えるだろう。

姉悦子と弟泰は共に私の三歳違いだ。従って年齢毎の体験も違い、私とは別の母親観があるだろう。それを違とはしない。特に姉は同じ女だし、母は姉に厳しかったから、母にはかなり違った見方をしているだろ

う。例えば母は姉にペン習字をする様に勧め、習字道具を買い与えたが、姉はそれをしなかった。母は姉を部屋の隅に追い詰め、姉を片手で叩いたのを私は見ていた。姉はギャッと叫んで泣いたが、私には母が姉に美しい筆跡の女性になって欲しい一心だったことが分っていた。

母は行動が早かった。逡巡するとか、じっと一人で思い悩むということが少なかった様だ。私が大学生活を京都でしていたころ、就職して広島に住んでいたころ、母が私の様子を見に仙台から来て数日滞在したことがあった。一緒に市内を歩いたりしていた時の母は非常に行動的で、路上でタクシーを拾おうとした時も、来るタクシーに次々と手を上げて止め様としたりして、「こんなに落ち着きの無い人だったのだろうか」と思わせた。私が結婚して東京に住んでいたころ、家内の出産のサポートに何回か私の家に滞在したが、家内が病院から戻って来て仙台に帰る時も、さっと帰って行き、名残を惜しむという風情では無かった。自分がやるべきことは終ったので、さあ帰りますね、という感じだった。

似た印象は悦子姉からも聞いたことがある。姉は母をさそって一月に数日の北米旅行を楽しんだことがある。母は70歳に近かったのではないか。冬の朝成田空港に母と姉の二人を見送りに行った時に母が、まるで熱海の一泊旅行の様な軽装で表れたのを見て驚いた。これから冬のカナダやニューヨークに行く人には見えなかった。一方の姉は大型の旅行鞄を傍らにしていた。後で姉から、「お母さんはあっちこっちへちょこちょこ勝手に行ったり、しょっちゅう見えなくなったりで、探すのに大変だった。自分が楽しむどころでは全然なかった。」と聞いた。だが、姉から送って来た、ホテルの部屋に立っている写真の中の母は見た事がない程

嬉しそうに微笑んでいた。

母には、自分でこうすべきと思った事を直ぐ行動に移す性格と共に、内に秘めた激しさと共に、人の悩みや苦しみを自分のものとして悩み苦しむ優しさがあった。他に様々な欠点が母にあったとしても、この美点だけでも他の全てを消し去ってしまうと私には思える。

これは思い出すと辛いので長い間書けないでいたことなのだが、本多元子という私の母について何故私がそう思う様になったかを説明するには、そして母がどんな人だったかを記録に残すには必須だと思うので、以下に記す。1981年9月に長女の淑が産まれ、20数日ほど入院してそのまま昇天した。当時母は小平市の我が家に出産のサポートの為に滞在していた。私が入院先の清瀬の病院に何度も通い、病状を医師から聞いていたが、望みが無いことを告げる電話を受けたのは同じ小平市に住む叔父だった。母は叔父からその話しを聞き、私を呼び出し、そのことを告げた。その後私が淑の入院している病院へ行き、自宅に帰ると母は記憶を亡くしていた。この事態にとても心を痛め、苦しんだせいだった。記憶を亡くした母を抱きしめた時の、その年老いた痩せた体の感覚は今でも忘れられない。妻の千香子の伯母達も我が家に集まったが、母を見て、この方は人の苦しみを自分のことの様に苦しんでいる、舅の鏡だと言っていた。千香子は熱を出して寝込んでしまい、記憶を亡くした母を相手に、生じた様々な要件を処理しなければならなくなり、私は部屋の中で半狂乱になっていた。

その夜、私が眠っていると、私が暗い森の仲を彷徨っていることに気が付いた。木々の茂みのあちこちに悪魔の様な動物が目を光らせてこっちを見ていた。私は、亡くなった娘がこんなところにいると可愛そうだと思

い、天国に連れてゆかねばと思い、昔見たイエス様の肖像画を一生懸命思い出そうとした。すると私は暗い中をどんどん昇って行き、上に光のあるのを目指してずうっと昇ってゆき、やがて光につつまれ、安心した。その間、私は亡くなった娘をしっかり胸に抱きかかえていたのだった。安心した私は再び眠りに落ち、朝になって目が覚めた。単なる夢だと言うには余りに生々しい記憶だった。この事実は今でも忘れられず、その感覚は今でも時々フラッシュバックする。

母は少しずつ記憶を取り戻し、思い出す度に泣いた。泣いている母を抱きしめたときの母の年老いた体の感触は、母が亡くなり、数年経つと私の記憶からも薄れてきた様な感じがした。この長い母の思いでの記を書こうとしたのは、そうした母を忘れない為だからだ。更に、母のその様な美質がどこから来ているのか、それを知りたいとも思ったからだ。

この様な、人の苦しみを我がものとして苦しんでくれる人が側にいることは、言い古された表現だが、苦しんでいる者にとってどんなに慰めになるだろう。それが本多の血脈だと単純には思いたくないが、あるいはそうかも知れない。逆に、自分の正義しか見えず、それを居丈高に押し付ける無神経な者にはどんなに心が傷付けられたことだろう。

記憶を半ば取り戻しつつある母を妻、千香子の伯母達が母を手厚く介抱してくれ、1年ほど後に慰安の温泉旅行に連れていってくれた。伯母達の思いやりにはお礼の言葉もない。

母は英会話もそこそこ出来た。多摩霊園の本多家の墓所での葬儀にテキサスから来て参加した Amelia Shidzu Paredes に、母は式の前後やその後の食事の席などで話しかけていた。勝手が分からない Amelia への親切だったのだろう。母が英語を話しているのを見るのはその時が初

めてだった。ちなみに、Amelia は母と同じ本多庸一の孫で、母の1ヶ月前に生まれ、母の1ヶ月前に亡くなっている。

母は繁氏から「だから本多の人間は駄目なんだ」と言われ続けていた。本多の人間は何でも他人に与えてしまうので駄目なのだそうだ。本多の血脈ではないことを意識していたので言えたのだろう。ある時、仙台の庭に成った柿の実で作った干し柿だったと思うが、母がそれを人にあげようとしたら、だから本多の人間は駄目なんだ、と言って繁氏が怒ったと母が言った。自分が食べないでも人にそれを与えようという行為は私には特に異常とは思わず、むしろ微笑ましい過ぎた程度のお人好しだと思うが、母には怒られる意味が分らなかった様だ。母は「お父さんきっと自分で食べたかったのよね。」と私に言った。「私なんか天国に宝をいっぱい積んでいるんだから」と言うこともあった。

繁氏が日本の明治以降の基督教の宣教史をまとめ、出版していたころ、母は、私に「本当に弘前の学校から誰ぁれも招聘に来ないのよ。でも良かったわ。それで本多家の事が色々調べられて。神様のお計らいだわ。」と言ったことがあった。繁氏は仙台の宮城女子高等学校の主事だったから、経歴から言って弘前の基督教主義の学校から校長として招かれても良い立場だったろうが、誰一人として招聘には来なかった。管理者の仕事は雑務だから、管理者になれば調査研究の時間は無くなるのが当然で、母もその事を言ったのだが、学校経営は私企業の経営とは異なり、時間的体力的に余裕がある。事実、繁氏は高校の主事時代に多くの調査を行った。母はこう言うことで自らを慰めていたのだろうか？それとも本多家を継いだ責務の一旦を間接的に果たしたことを評価して

いたのだろうか？今となっては分らないが、母の心の中で本多家というものが大きな位置を占めていたのだ。

忘れられない母の表情がある。2年間浪人して志望校全ての入試に失敗し、結局京都にある大学に入る為に仙台駅を離れる時、私は打ちのめされた思いで大阪行きの夜行列車に乗った。列車は仙台を午後発ち、京都へは翌朝着くはずだった。母だけが見送ってくれた。列車の席に座ると窓の外に青い空が広がるのが見え、その下に母が立って私を見ていた。泣きも笑いもせず、どちらかと言うと無表情に近かった。列車が走り出し、私は席に身を沈めたままだったが、私の乗った列車を、母は何時までも目で追っていたことだろう。私が母と二人きりで外に出ることは稀だったが、私の東北学院中学校の入試の時は母が付き添ってくれた。試験が終わり、母は私をデパートの食堂に連れて行ってご馳走してくれた。疲れてボーっとした頭にはデザートが甘く心地よかった。

母は 1999 年 9 月 4 日午後 6 時 18 分、転移性脊髄腫瘍のため 77 歳で天に召された。母が首筋に異常を感じたのは 99 年の 2 月ころで、漢方の治療所に通っていたが、症状が改善しないので西多賀病院で診てもらったところ末期治療が必要という判断になったと聞いた。同年 4 月に宮城県立ガンセンターに入院した。ストレスの多い生活が母を癌にしたのかも知れない。母は元来健康な人で、もっと長く生きるつもりでいた様だ。その為に自分の体の異常には気付かなかったのかも知れないし、それを無視していたのかも知れない。または感じていても誰にも言えなかったのかも知れない。

入院中は親類縁者が訪問して最後のお別れをし、子供たちが病室に寝泊まりして看病をした。母は入院の初期には手帳に俳句や和歌を綴っていたが、入院が長くなると「早く天国に行きたい」と言い出した。「自分は子供のころから天国があることを信じ込まされて来ているから、死ぬことはちっとも不安じゃない。早く死んで天国に行きたい」と言っていたと、母を看護していた看護婦から聞いたと、母を見舞った人から聞いた。「信じ込まされた」は看護婦向けのくだけた表現だっただろう。しかし、繁氏はなぜ母の意識がはっきりしている時から、母の言う事は信用しないように、と周囲の者に念を押していたのだろうか。　母は次第に衰弱し、モルヒネの投与で意識が混濁することが次第に多くなった。

子供達は皆成人し、家庭を持ち、7 人の孫を得た。神様が、「お前はやるべきことはもう全てやったのだから、早くおいで」と憐れんで天国に招いてくれたのではないかという気がする。

出逢い

本多元子

昭和六十一年、永年私の通って居た教会に、新しく礼拝堂が建つ事になりました。私共婦人達で細やか乍らも献金をしたいと、関西の工場から、靴下、下着類を取り寄せて利益を得ようと仕事を始めましたが、牧師から一笑に付されました。結局その礼拝堂は個人の私財で全部出来上ったのでした。藤元さんと靴下類を売ったお金は宙に浮いてしまいました。たまたま数年前から、西多賀療養所でボランティアをしておりましたので、ありのまま舎の募金にお捧げしましたところ、わざわざ車椅子の青年がボランティア室まで領収証を持ってお礼に来て下さいました。（後日その青年が自立ホームの阿部恭嗣さんとわかりました。）その様な御縁で、落成式には藤元さんが出席され、「日曜毎に礼拝もあって、外部からも歓迎ですって」という報告を得、私は神様のお導きのように思いました。

最初、鈎取四丁目の辺りを探してウロウロ、暫くして西多賀四丁目の記憶違いに気がつき、辿り着いた時は、礼拝は終っていましたが明かるい雰囲気で、古波津先生の坊ちゃんが作られたクッキーとお茶で懇談がなされておりました。身障者として今日までどんなに苦しまれたであろう筈の方達なのに、ユーモアがあって笑い声のある集まりに、むしろホッとする想でした。廊下には沢山の善意による品物が安く売られているのを見るにつけ、多くの方達の協力にほのぼのとした温かさを覚えました。ボランティアの方達にも頭が下がりますが、車椅子の方の前向きの姿勢には“偉い！”の一語です。中鉢さんは足で編物をして一枚仕上げた！と

嬉しそう。週報をワープロで打つ佐藤君、平間夫人は電動ミシンを使ってタオルの美しい手拭きを作り、バザーで皆売れたと喜んでいらっしゃった、その喜びを共に歓びたいと思います。

古波津牧師のお説教は、永年聞き慣れた聖句でも私の耳には新しい言葉として響きます。身障者には同情する言葉ではなく「甘えず、くじけず、自分で出来る事は進んで実行しなさい、」と叱咤激励。ヨハネ伝九章について、弟子達が「先生この人が生まれつき盲人なのは、誰が罪を犯した為ですか？」イエスは答えられた。「本人が罪を犯したのでもなく、またその両親が罪を犯したのでもない。ただ神の御業が彼の上に現れる為である。」この聖句を読む度に考えます。因果応報という佛教の解釈に比べればキリストの言葉は明かるいのですが、あまりにも不自由な生活を強いられている方達には「神様はなんて残酷な！」と。先生の説教は続きます。突如！盲目になった青木まさる医師の信仰経験談でした。聞く人々は「ああ自分にはまだ物を見る目がある！」とそして心の目も開かれたと思います。

さる十二月二十日はクリスマス礼拝で、山田寛之（ひろゆき）さんの御命日に当り、先生は「ありのまま舎」の名前の由来を話されました。

一九七六年、筋ジス患者のありのままの姿を社会に訴える為、創刊号を出されて十年との事。お兄様等の御遺志を継がれた富也様を中心に「ありのまま会自立ホーム」が完成されました事等々。ここで先生は「神が寛之さんをこの世にお遣わしになったのです」とつけ加えられました。その時私はキリストの十字架を思い浮かべ、山田さんのお母様の穏やかな

面影が伺われました。

目に見える物は儚く消えますが、永遠に生きるという事の尊さを教えられ感謝して居ります。

（編者記）

以上は平間光子さんから送られてきた、ありのまま舎の礼拝に出席している人たちの文集に寄稿した本多元子の文です。

略 歴

零歳	1921年12月19日　宮之原信次郎、まりの次女として東京府世田谷村に生誕。まりは本多庸一の長女
7歳	‘29年4月福井宝永尋常小学校に入学
14歳	‘36年4月弘前女学校入学。寮生活を始める。同年11月黒石教会で受洗
19歳	‘41年 3 月弘前女学校卒業。同年4月小田原濠端幼稚園勤務。同年 10 月妹哲子昇天
22 歳	‘44年 11 月父、信次郎昇天
23 歳	‘45年 6 月弘前市に母、姪珠子と共に疎開　（珠子の母の姉星子は珠子の出産時に昇天）。同年 7 月弘前市和徳小学校事務員となる。同年 9 月 14 日鈴木繁と結婚
不詳	兵庫県赤穂、青森県三本木、弘前に転居
24歳	長女悦子誕生
不詳	兄右近戦死
27 歳	‘50年3月4日長男謙誕生 ‘50年6月6日夫繁と共に本多二郎との養子縁組届出入籍（本多庸一の嫡男の血統が途絶えた為の親族会議で、庸一の長女の次女である元子に嫡男の謙が居り、且つ夫繁が望んだ為。）
32 歳	‘53年9月宮城県仙台市に転居
不詳	母まり昇天
34歳	‘56年4月向山幼稚園保母となる
44歳	‘66年3月向山幼稚園を退職、自宅でピアノ教室を開く

78歳　　‘99年4月転移性脊髄腫瘍の為宮城県立ガンセンターに入院。同年９月４日18時18分　昇天

注　年齢は満年齢です。

あとがき

母は1999年9月４日に癌が全身に転移して亡くなりました。私は母が入院していた名取市のガンセンターには臨終の数分後に東京から到着しましたが、そこで見た母は鬼女の様な形相をしていました。心の中で激しい葛藤があったことを伺わせました。癌という病気も強度のストレスが身体の現象として現れると聞きます。母の死は緩慢な自殺だったのではないか、という疑念が何年も残りましたが、今回この文集を作るに当たって何人もの方々が私と似た見方をしているのを知りました。

例えば、母ととても親しかった方からは、「余りにご主人にいびられて神経が疲れていたのかも知れません。」という文をいただき、更に、母と「電話でお話した時も、“主人から、熱がある時でも、草取りさせればそんなものは出来る”と言われたと嘆いて」いたという話しを聞きました。

母は、自分はこう生きるべき、という姿勢が保てなくなる程に神経が疲れ果ててしまい、それが「自分はいつ死んでもいい」という言葉になり、更に「自分は死ぬのは怖くない、早く死んでしまいたい」という声になったのだろうと推測します。

私は様々な事情から両親の家から距離を置いていましたが、この様になる前に、母には何とかして上げられなかったのだろうかという悔いが残ります。

昨年の暮ごろから、父繁の取った行動により私が強度の心的ショックを

受け、何日も眠れない日が続き、このままでは脳溢血になってしまうのではないかと思うほどでしたが、そこで気が付いたのは、母もこの様にして癌になり希望を失って亡くなったのではなかったか、ということでした。

母が亡くなって1周年の記念に遺族らが集まった席で誰かが、「（元子さんが）亡くなってご不便でしょう？」と言い、それに対して繁氏がにっと笑って、「いやあぁ　かいてきぃ」と応えたのを聞き、一同は声を失ったことでした。

最後に、母の葬儀で弔辞を読んだＦさんからの手紙の一部をご紹介します。Ｆさんからは載せない様に言われたのですが、、、

「（前略）元子さんには色々なことを学びました。お世話になりました。私も元子さんを第一と考え大切な方とありがたくおつき合いさせていただきました。中国のお土産ですが、中国にいる間中、本多さんに何にしようしようと探しましたがとうとうみつかりませんでした。それで皆様と同じにカラフルな杯になってしまい気に入らないのはわかっていてもどうしようもありません。とうとうこんなのになってしまったと云ってお渡ししたら私の声が高かったのかよくあの茶の間の奥にいて聞こえたものです。それが悪いと絶交しろと云われたそうです。そして返されました。これにはびっくりしてあきれたようです。私だけではないです。風邪を引かれた時、今日は草とりをすると云われたときはしなければならないと云われてました。（中略）

今日は（8月）十三日、謙さんに父上様に暑中見舞からでもと云われ　わ

たくしもやめればよかったのに tel をしてみたら、Xと云ったら、あなたの声はききたくないと云われました。

この暑いのに、私が毎日のん気に遊びほうけている訳でもないのにでも、私のほうもほんとに同じ気持ちですから、太陽はご主人を中心に廻っている訳ではないのですから。（中略）どんな無礼をされても元子さんがいる間はいつもいつも本多さんの事を考えてまいりました。（後略）」

2007年　秋